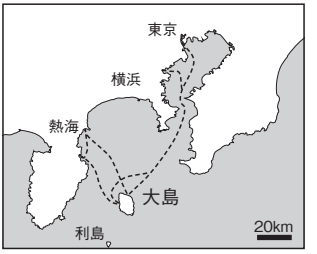
1 大島（東京都大島町）――大島海洋国際高等学校

新たな海洋国際教育を目指して

東京都立大島海洋国際高等学校　主幹教諭　平塚　正彦



大島：東京の南海上約120kmにある伊豆諸島最大の島。面積91.05km²、周囲49.8km。人口7,762人（平成28年6月現在）。活火山の三原山は御神火様として崇められ、『日本書紀』に最古の噴火記録がある。椿まつりやダイビングなど観光人気も高い。

●島の自然を活かした特徴ある高校

大島海洋国際高等学校は、都立高校の中でもっとも特徴のある学校であると自負している。起源は昭和二一年、都立大島農林学校に水産科が設置されたことである。その後、農林学校は大島高校と改称、同四六年には同校から水産科が独立する形で大島南高校が開校、平成一八年に学科改編して現校名となった。各学年二クラス、学年定員八〇名という小規模校である。二年次より国際系と海洋系に分かれて授業を展開。「海を通して世界を知る」というコンセプトを持ち、海洋教育と国際教育を行っている。

伊豆大島南部の波浮港近郊に位置し、実習船「大島丸」も同港に係留。一級小型船舶操縦士の教習所として、生徒たちに教習している。インターハイや国体に毎年出場しているセーリング部や、全国大会二年連続準優勝のカッター（一二人で漕ぐ大型ボート）部も波浮の港で毎日練習をしている。

大島セミナーハウス（合宿施設。スポーツ棟と宿泊棟を完備）の閉所にともない、本校の寄宿舎（ドミトリ）をその宿泊棟を利用して開設した。前身である大島南高校の拓水寮（平成二〇年閉鎖）は、学校に隣接していたが、ドミトリは徒歩で三〇分ほど（約二・五キロメートル）離れているので、生徒たちはバスで登校している。バスの運行は島内の大島バスに委託。二年前までは下校時もバスを運行していたが、料金の高騰により、現在では登校時のみ一台のバスを四往復させている（下校は徒歩や路線バスを利用）。ドミトリの特徴は、「宅習」という自習時間（二時間半）である。生徒の代表であ

る代表生徒（プリフェクト）や委員会が主体的に活動している。

●東京都の唯一の海洋教育拠点

海洋教育は、実習船・大島丸を使い、一年生の基礎航海学習をはじめとして、学年進行にともなって移動距離を長くしている。海洋実習は一学年のカッター、二学年のダイビング、三学年の小型船舶の操船が主なものである。

カッターは客船からの避難のための救命艇であるが、現在は海洋訓練としての手段となっている。一二名の漕ぎ手、舵を持つ者、号令を出して指揮をとる者の三つ役割がある。港の中で基礎的な練習を行い、経験を積んで体力をつけた後、海が凪いでいるときは外洋へ出ることもある。漕ぎ手の息が合ってオールが揃うと楽に進んでいくのが醍醐味である。水しぶきが掛かることも多く、大島のきれいな海の恩恵を受けている。島の静かな湾内と波のある外洋を両方体験できるメリットも大きい。

平成８年竣工の実習船・大島丸。

ダイビングの実習はプールで基礎練習を行い、スキンダイビングに慣れてからスクーバダイビングへと進む。学校に一番近いトウシキ海岸は自然のリーフとなっており、太平洋に面している割には安全な場所である。プールでの基礎訓練の後に波浮港やトウシキ海岸で発展的に練習を行えることは、技術の向上と安全確保の点で重要なことである。

小型船舶の操船実習も海面の静かな湾内で練習し、外洋に出てから広い海面で習熟させる。この点でも大島は絶好の立地といえる。

日本は、国土面積では世界の中で六一番目だが、排他的経済水域の面積では六番目である。この広大な面積の中で、東京都に由来する海域はじつに三八パーセントとなる。海洋基本法制定など海に関する関心を深めるべく、海洋に関する教育に力を入れるべきであるが、海洋の学習をする高校生は都内に本校の一クラスのみである。

全国的に船員の数は不足し、船員の育成が急務となって

いる。本校では小型船舶操縦士の資格しか取得できないので、船員希望の生徒は上級学校へ進学する。海洋系では、三年次に船舶系・マリンスポーツ系・生物系に分かれて専門の学習・実習を行い、上級学校への進学につなげている。

●地域住民と連携した留学生の受け入れ

本校は、都立高校で二番目の国際高校として開校した。国際教育としては、英語教育の充実はもちろん、留学生の受け入れや送り出しを行っている。二年次の春休みには、サイパンへの語学研修も用意している。都が行っている次世代リーダー育成道場にも毎年参加し、留学経験を積んでいる。

外国人の英語指導助手は、以前は都立大島高等学校と兼任だったが、今では語学指導などを行う外国青年招致事業によって一名が専任配置されている。外務省職員や大学の先生から国際的な講演をしていただくこともあるほか、TOEIC Br:idge（基礎的なコミュニケーション英語能力を評価するためのテスト）の全員受検や英検受検指導も行っている。

毎年、AFS（国際的な非営利組織。留学プログラムの提供や国際交流の推進などに取り組む）を通して留学生を受け入れているなど、国際理解教育にも力を入れている。留学生の在籍は半年間。以前は、寄宿舎に入れていたが、寄宿舎の生活では日本の文化に触れることが少ないこと、留学生が寄宿舎に馴染みにくいこと、寄宿舎での経費を学校が負担できないなどの理由から、現在では、地域の家庭にホームステイする形をとっている。地元の卒業生の保護者を中心に「国際交流支援の会」を組織し、留学生だけでなく、大島の国際交流についても支援していただいている。

大島海洋国際高校の全景。

平成二八年度はホンジュラス共和国より女子生徒一名の留学実績がある。留学期間は半年間と長くはないが、ホームステイ先の家庭がなかなか確保できず課題となっている。

留学生たちは、地元の中学生との交流や大島の諸行

事に参加することで、地域に刺激を与えている。今年度の留学生は、郷土芸能部に所属し、御神火太鼓の一部を習得した。留学生がどんどん日本語に習熟していく様子は、生徒にも良い刺激となっている。

●国際交流の場で生きる大島の伝統芸能

一年生の必修科目として「日本文化」を全員に取り組ませており、大島の伝統芸能である和太鼓の御神火太鼓と、波浮港の地踊りである大漁節を保存会の方々に教えていただいている。

御神火とは、三原山の噴火のことを神の火と呼んでいたことに由来する。打ち手の左右に太鼓を置き、交互に打つ打法は独特のものである。授業の中では複数の打者が一つの太鼓を打つ「揃い打ち」から始まる。地元の生徒のなかには小学生のころより習っている者もおり、部活動では郷土芸能部として活躍している。

地踊りの大漁節は、房総の大漁節をアレンジしたものである。波浮の港を開いた秋廣平六が房総の出身だったので、その影響があると思われる。海での活動の多い本校には大漁節が合っている。なお、平成二九年五月二七日に地元のNPO法人「波浮の港を愛する会」が中心となって「秋廣平六二百遠忌法要と記念行事」を開催予定である。

これらの郷土芸能は、国際交流の場において非常に生かされる。実習船で外地に寄港していた時に、現地の人々は文化的な郷土芸能を披露してくれる。しかしながら、本校側は、地元で育ち、芸能を習っている子ども以外、郷土芸能を披露することはできなかった。「日本文化」の設置は、異文化を理解するには、まず自国の文化を理解していなければならないとの思いを形にしたものである。

大漁節を習う生徒たち。

いまでは生徒全員が御神火太鼓か大漁節のどちらかを実習するようになっている。習得した芸能技術は、大島丸で釜山やサイパンへの寄港時、現地の学校と交流する際に披露していたが、ここ数年は諸般の事情により外地に寄港していない。郷土芸能部は、吹奏楽部とともに地域の敬老会に出演して好評を得ている。

●地域行事への参加やボランティア活動を行う教員・生徒たち

本校では、大島の諸行事へも積極的に参加している。大島は体育的な活動が盛んである。地域対抗で行われる町民レクリエーション大会や、駅伝、マラソン大会、水泳大会などには生徒や教員が参加している。

町民レクリエーション大会では、本校教員が学校周辺地域の青年団として参加し、優勝したこともある。駅伝大会も本校から六チームが参加。数年前には、本校関係者のチームが四冠を達成したこともあった。大島の椿まつりの中で行われるカメリアマラソンは、学校行事として参加している。生徒たちには「沿道に応援の方々がいて走りやすい」と、好評である。これらイベントにあわせて都内の保護者が毎年四〇名程度応援や、イベント参加のため来島している。町への経済効果に多少の貢献ができているのではないだろうか。

地域の敬老会で日頃の練習の成果を披露。

ボランティアも積極的に行っている。もっとも顕著なものとしては、ボランティア部による車椅子寄贈があげられる。大島各所からアルミ缶を回収し、大島丸が東京に寄港する際に運搬を依頼して売却する。アルミ缶は、人海戦術でひとつひとつ潰し、大島丸に積む際には、その時の実習生と船員が協力して行っている。老人ホームや被災地に贈った車椅子は累計七三台になった。学校の入り口脇にアルミ缶回収ボックスを設置して、地域の方々にも協力してもらっている。

寄宿舎においても地域のボランティア活動を推奨しており、福祉施設や保育園へ生徒が行き、交流やお手伝いをするなど好評を得ている。

セーリング部は波浮の港で行われてきた「トウキョウズカップヨットレース」の運営補助や選手と住民との交流会の片づけなどにも参加している。

生徒たちは、実習船や寄宿舎において「協力」を学ぶ。ボランティア活動はその実践であり、奉仕の精神を育む場として活かされている。

なお、平成二五年に台風二六号によって起きた大島の土砂災害の復興支援も行った。学校が現場から離れていることもあり、連日の支援はできなかったが、有志を募り、延

べ三〇〇名以上の教員・生徒が参加し、国土交通大臣より表彰された。

●地域に根ざした学校として

寄宿舎（ドミトリ）と実習船を使った新しい海洋教育を充実させるという東京都教育委員会の方針に基づき、新しいカリキュラムの検討が始まっている。老朽化した校舎とドミトリの改築も動き出そうとしている。本校が大島の南部地区に根差した学校として、今後も長く継続していくことを確信している。■

◆住民からみた海洋国際高校◆

東京から約120㎞の位置にある伊豆大島の波浮港の近くに都立大島海洋国際高校があります。全校生徒240名の大半が都内出身の生徒であり、徒歩30分くらいのところにあるドミトリで生活しております。都立高校では唯一の海洋技術や国際感覚を身につけるための学科があり、この若いエネルギーが少子高齢化で過疎化しはじめた大島の各所でさまざまな刺激となっております。私の会社のすぐ目の前に同校があり、学校の様子は手に取るようにわかります。まさかここに200人を超える若者がいるのかと疑うほど静寂そのもので、熱心に勉学に励んでいる様子が伝わってきます。しかし放課後になると、それが一転、各クラブ活動の練習などでは高校生らしい逞しいエネルギーで、校内は活気に満ち溢れます。同校は、生活指導がかなり行き届いております。その一例として、地域住民や観光客などに気持ちの良いあいさつを励行していることがあげられます。また、郷土芸能の継承やさまざまなボランティア活動にも積極的にかかわっており、地域はもとより大島全体で愛されている学校です。

平成18年の学科改編により前身の都立大島南高校から移行され現在の校名となりました。移行当時は、校長先生はじめ教職員の方々の並々ならぬご苦労があったようです。連日夜遅くまで校舎に明かりがついており、授業などを行いながら、新しい高校のあり方について必死に模索していたとのことです。あれから約10年が経ち、あの時の苦労はしっかりと実を結んだと思います。毎年の入学希望者も多くなってきています。しかし、校舎やドミトリの修繕、実習船「大島丸」の新船建造、乗組員の確保など、悩みの種はまだまだあるようです。

私は、学校運営連絡協議会の委員を務めております。微力ではありますが、つねに地域住民と一緒になり、大島海洋国際高校がますます発展するよう協力していきたいと思っております。

（元・大島南高等学校PTA会長　大島在住　実川吉樹）

平塚正彦（ひらつか まさひこ）
昭和39年、東京都生まれ。東京水産大学水産専攻科修了後、同63年東京都入都。大島南高校海洋科教諭から一貫して現職。